

秩序を破壊した鴉は自由を持って余す

A C S

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ISとAC4とACVDまでのクロスオーバーはよく見るけれど、初代ACとAC2までのクロスオーバーって見ないよね？ という理由で書いた。続かない（白目

目次

鴉とM

——俺の一番古い記憶は、酒乱の父が酒瓶で殴り付けて来る瞬間の恐怖、怯えていた子供の頃の惨めな姿。

母はそんな父を恐れて子供を置いて逃げ出し、その当て付けに暴力を振るわれ続けた俺は借金苦と酒代欲しさに二足三文の値段でどこぞの研究機関に売り飛ばされた。——歳は九才だったと思う。

当時の俺は売り飛ばされた悲しみよりも父からの暴力に怯えなくて済むと言う安堵の方が強かったが、研究機関で俺を待ち受けていた物は過剰なまでの戦闘訓練だった。

半世紀前に起きた大破壊と呼ばれる最後の国家間戦争によって、人類は地上からその姿を消し、地下世界へと移り住んで以降は、国家の代わりに企業が自由競争によって地下の人類を繁栄させて来た。

そして彼らは自分達権力に組まない唯一の存在——レイヴンへと仕立て上げて俺を使う気だったらしい。

十年にも及ぶ訓練とアーキテクトとしての刷り込み教育、企業の手先として仕上げられた俺はそのままレイヴン試験を合格し、ネストへと登録された。

——彼らに誤算があったとすれば、長期間に及ぶ過酷な生活に耐える為に俺が自由を渴望し続けていたと言う事と、それによって俺が反旗を翻して敵対企業からの襲撃依頼を受けて壊滅させられたと言ふことだろう。

晴れて企業と言う鎖を断ち切ってレイヴンとなった俺はクロームとムラクモ・ミレニアムとの小競り合いを利用して金を稼いでいたが、クロームが減びた辺りで雲行きがおかしくなった。——思えばこの時、既に俺はイレギュラーと判断されていたのかも知れない。仕事を選ばず任務を遂行し、数々の敵を葬って来た俺は最終的にレ

イヴンズ・ネストから狙われた。俺は数々の刺客と二機のナインボールを撃破し、ネスト本体を破壊した。

崩壊するネストはマシンボイスで語る『これで満足か？ 秩序を……世界を破壊する……それがお前の望みなのか？』と。

——俺はただ自由が欲しかった。利益や秩序に縛られたくなかった、ただそれだけだった。

『我々は必要だった……だからこそ我々は生まれた……秩序無くして人は生きていけない……例えそれが偽りであってもだ』

——もう縛られるのは嫌なんだ。産まれた時から俺は不自由だった。自立したのなら、それを求めてもいいじゃないか。

『生き抜くが良いレイヴン……我らとお前……どちらが果たして正しかったのか……お前には知る権利と義務がある』

——無論、自由を得る事の方が正しい。そう、この時は思っていた。

だが秩序を破壊し、世界を破壊した俺が得た物は単純な強さと生きる理由が見当たらない苦惱、自由を手にした代償はあまりにも重く、手にした自由は俺には持て余す物だった。

レイヴンと言う事に誇りは無い、それ以外に生き方を知らないからそう生きているだけで、二足三文の端金でも俺の命を狙う罠であつても等しく受け続けた結果、俺は一つの答えに辿り着く。

——自由など、憧れであれば良かったのだと。

だから俺は火星へと向かい、抗争と言う名の秩序の中へと首輪と鎖を求めたが、俺と俺の機体プロビデンスの前に敵う者は無く、目を掛けていた新人すらその例外では無かった。

——秩序を破壊した物が秩序を求めるなど、笑い話にもならない。

愛機のコクピットの中でそう自嘲した俺の目の前には護身用のハ

ンドガンがあり気が付けばこめかみへその銃口を押し付けて――

「――？　――！！　聞いているのかと言ってるんだ！！

アレス！！」

「……聞いてるさ、マドカ」

求人雑誌を顔に当てながら拠点にしているボロ小屋で昼寝をしていた俺は昔の夢を見ていたせいかな非常にブルーだった。

自害した筈の俺が何故生きているのかと言う理由は分からない、しかし国家と言う物が残っているこの世界の古い話に胡蝶の夢と言う話があるからそれと似たようなものだと言われ勝手に解釈し、正しかろうと間違っているように納得している。

そしてこの世界に来て俺はレイヴンとしての生き方以外が出来ず、金次第で何でもやる傭兵として生活していた訳だが……その最中に誘拐したこのマドカという少女からストーカー被害を受けている些か困っていた。

出会いに関しては何処ぞの権力者から凍結されたさる実験の個体回収を依頼された事がきっかけで、金に困っていた俺は高額の前金報酬と共に指定された場所からこの娘を攫い、依頼主に引き渡したのだがその際に口封じとして命を狙われた俺はその場で襲って来た人間を全て返り討ちにし、依頼主諸共全員を射殺。

引き渡しの際に拘束していたマドカを解放し、その場を後にした筈なんだが……何故か執拗に跡をつけられ、なし崩し的にオペレーター兼同伴者となって今に至る。

「貴様と言う奴は！！　あれほど仕事を探して来いと言って置いたのにうたた寝とは良い度胸だな！！」

「……仕事なら探してるさ、この通り」

「何処のツ！！　世界にツ！！　求人雑誌を購読する傭兵が居るんだツ！！」

「……フン。表の仕事の方が二足三文の襲撃や破壊任務よりは稼げるだろうさ」

「それは貴様が弾薬費と差し引きすれば雀涙ほどしか残らない様な戦い方をしているからだろうが!!」

バンバンと年季の入った机を叩きながら買ってきた日用品を乱暴に置くマドカを見ながら、俺は始まった説教を聞き流しつつ新聞を広げた。

——この世界は前の世界とは違い最強の兵器であるACが無い。しかしそれに準ずるISと呼ばれる機動兵器が存在する。

元々は高性能な宇宙服として作られたらしいが、白騎士事件と呼ばれる一件以来兵器としての側面が強くなり、今では超兵器として扱われているらしい。

と言っても本格的な軍事利用は禁止されている他、一応はスポーツと言う体裁で使用されている為、かつての地下世界の様には今のところはならないだろう。

「……イレギュラー、か」

「うん？ 何か言ったか？ アレス」

「……いや、何も」

白騎士は秩序と世界を破壊し今の情勢を作り上げたが、その行動はかつての俺と同じ——即ちイレギュラー。

まさか自分がイレギュラーを嫌う側になるとは思わなかったと思わず笑っていると、料理をしていたマドカが二人分の食事を持って来た。

「さあお前が好きなカレーライスが出来たぞ、アレス」

「……好物と言うよりも、お前の料理でまともに食べられるのがカレーライスぐらいしか無いというのが正しいんだがな」

「う、うるさい。とにかく食べ!! そして仕事の話に移るぞ!!」

俺の指摘によって若干顔を赤くしたマドカは掻き込む様にカレーを頬張って行く。

俺は諸々を誤魔化す為なのか非常にスパイスが効いたカレーを口にしながら、マドカの持つて来た報酬前払い且つ細かなミツシヨンプランの無い仕事の内容を頭に入れて行くのだった。